



“ツマミをまわせば点火一発”にはできないこと。

どんなグッズも古ければ良いというわけではないが、21世紀に入ってどうも消費側からのモノ作りが目立ってきた。近年の製品はモノの作り手と使い手の関係というが、使うということより消費されるための勝手が優先されているのであろう。このストーブひとつにしても実にアナログな見かけだが、キャンプにおいて使用するには十分である。僕ら日本人には素材を“焼く”“煮る”といった調理法が主流になるので、火の数はひとつでもキャンプにおいてこと足りることが多いのだが、近年ではキャンプ場で世界各国の料理を振る舞うことを楽しんでいる方々も多いので、2つあることは実にありがたいのかもしれない。何よりも燃料がガソリンで済むのはバイクで移動する人間にはありがたい。

ところで燃料の注入コックの場所がくぼんでいる理由をご存知だろうか。漏斗としての機能を持たせているのである。またこの風除けは収納時にストーブの保護にもなっている。箱から取り出してのセッティング。ガスを注入してポンピングでガス化する時間。ストーブを暖めて出力をあげる時間。これらの経過こそ、自然の中での料理を楽しむための儀式のようにも思えるのである。そんな時間を楽しむためのキャンプクッキングでありたいものだ。ただひとつばかり残念なことがあるのは、日本のガソリン事情である。アメリカなどで普通に売られているガソリンのオクタン価に比べてその数字が低いのだ。

ストーブの収納ケースを広げると天板となり、ともに収納されていた足を組み込むように作られている。小さいだけがコンパクトではないとも思えてくる、そんな作りだ。



キャンプ場に電源があるのが当たり前の今日、煌々と照らされたキャンプサイトより、ほのかな灯りを愛しむ。



今時キャンプで鹿角サギをささばくもいらないので、ここまでのは必要ないかもしれないが、これもたしなみであらう。



熱いコーヒーを両手にも、器にも優しいすくいも。



ここまで揃っていることが必要なかと思いきや、実はありがたいツールである。

さすが英国製ツッパ。派手な色で自立することも必要だろうか、オシヤレてありがたいものだ。



パンが四角いことが収納性や使い勝手において優位かどうかはともかく、このパンのサイズは車の缶詰のスラムなどの大きさにその理由がある。



本英雄、鳥取県住。47年式E1、SV所有。バイクでのキャンプを重ねたベテランバイカー。



この取材のためにいろいろとキャンプスタッフを広げてくれたのだが、まずはコーヒーを落としてくださった。きれいな状態だが使え込んだホーローのコーヒー落としとカップ。実際にはチタンのカップで、熱からずさめることもなくおいしくいただいたのだが……。



シユツカパーも作ったアメリカ軍用シユツカ。これだけのものが製中として売られさらたらとんでもない値段とることだろう。



TRADITIONAL CAMPING GEAR

バイカーが選ぶ キャンプ道具 この逸品!!

長くキャンプをしていると、自分のキャンプスタイルが確立し、自分にとって必要なものがわかってくる。ロングバイカーの選ぶ道具には“定番だから”だけじゃない意味がある。



刻み込まれた年輪以外は、まったく特別なことはないコールマンのホワイトガソリンバーナー。目をつぶってでも安定した火が着けられるだろう。

使い続けたのは必要なモノだったから。



レザーとシルバーでお馴染みのジリオンの代表の鈴木さん。ミーティング出店でもお馴染みだが、出店テントの奥にはテーブルがセットされているのをご存知だろうか。そのテーブルは作業場でもあり、レジでもあり、時には食堂にもなるといった鈴木さんにはなくてはならないものだ。その片隅にバーナーやストーブがなげなく置かれている。特別大切に扱われている様子もなく、自然な感じでそこにある。ミーティング会場に泊まることになり多い職業だ。バーナーがあっても不思議ではないが、その自然さがカッコいい。しかも道具のほとんどは相当に使い込んでいるものばかり。中にはカナダで手に入れた日本では入手できないものなんかもあるが、それも別に特別だから持っているわけではなく、使いやすいから使い続けているだけだ。



寒い季節のアウトドアで、頼もしいのは焚火だろう。ミーティング会場ではそれできない。ガスのストーブは自然な灯りで暖かさを提供してくれる。

鈴木典、神奈川在住。ジリオンの重宝。表、仕事の合間に重宝のソフイルでキャンプも道具は常に愛用。

